森鷗外『獨逸日記』に登場する「マリイ」とその息子に関連する史料

安　松　みゆき

はじめに

筆者はこれまで森鷗外がドイツ留学について記載した『獨逸日記』に登場する洋画家原田直次郎を軸に、原田に関係した人物の「マリイ」、「チェチリイ」、「エクシター」について考察してきている。鷗外が勉学のためにミュンヒェンに滞在した時、ちょうど原田も、原田の兄と同じミュンヒェンを滞在先に選び、ミュンヒェンのアカデミーで私費で絵画を学んでいた。ミュンヒェンの街は現在の東京と比較してもその規模は小さく、当時はさらに滞在する日本人の数も限定される状況のなかで、原田と鷗外は知り合い、その後原田が早逝するまで生涯の友となる。そのため鷗外は、画家原田の通常では知り得ない留学生活の一端を『獨逸日記』に書き留めていた。

前回には原田に関係した「マリイ」と、原田との間に生まれた非嫡出子アルベルト・ナオジローについて新たな史実を指摘した[1]。今回も「マリイ」とアルベルト・ナオジローに関する史料を新たに入手することができた。この史料によって非嫡出子の生年を改めて確定することができた。ここでその史料を紹介し、その史実を指摘する。

1　史料調査の概略

森鷗外の『獨逸日記』に登場する「マリイ」について概略する。鷗外はドイツに留学してミュンヒェンに移ったが、ミュンヒェンでは、洋画を学ぶために私費で渡独していた近代洋画家の原田直次郎と留学を謳歌する。のちに鷗外はドイツ留学時を振り返って『獨逸日記』をまとめるが、そのなかに原田との関係も記している。特にその原田をめぐって鷗外は女性関係で面白いエピソードを残した。それは原田が二人のドイツ人女性から好意を抱かれていた話である。一人は「チエチリア、プフアツフ Caecilia Pfaff といふ美人」で、家柄が良く資産を持ち、「語は英仏に通じ、文筆の才も人に超え」た画学生であり、もう一人は「容貌甚だ揚らず。面蒼くして軀瘦す。又才氣なし」の女性で、「マリイの父母は貧窶甚し」という喫茶店のウェイトレスだった「マリイ」である。真逆の立場にあった二人の女性の間で、原田は後者の「マリイ」を選んだ。鷗外はそのことに驚きをかくせなかったが、そのエピソードをもって原田の魅力を「自然児」と表現した[2]。

原田はミュンヒェンに留学した際にはすでに日本人と結婚をしていた。したがってドイツでの女性は不倫相手になる。それを強調したためだろうか。鷗外はこの二人について『獨逸日記』のなかでは、「チェチリア」の場合にフルネームで記述しているのに対して、「マリイ」は名前だけで登場する。最終的に鷗外は、原田がミュンヒェンを離れる際に、「マリイ」が子供をはらんでいたことを吐露するが、日本に帰国後もそれ以上のことは書き遺さなかった。

これまで「チェチリア」については筆者が20年来調べてきているが、「マリイ」については手がかりがなく、調査がすすまずにいた。しかし近年、神奈川県立近代美術館の三本松倫世氏によっ

て、原田との子供の関係でようやく「マリイ」の実在像の一端が明らかになった。すなわち、「マリイ」は原田との間に実際に男子を生んでいたこと、その男子の名前はアルベルト・ナオジローであることがわかったのである。それは、三本松氏が、子供の養育費をめぐって「マリイ」がドイツから訴訟を起こしていた史料を東京都文書館で見出したことによるものであった。

それを受けて、前回筆者は、その元となるドイツ側の原文史料を探し出し、さらに「マリイ」の住民票および「アルベルト・ナオジロー」の独身票を新たに入手して、これまで知られていなかった新たな情報を公開した。

今回の調査は、前回の史実をさらに確実なものとするために、特に「アルベルト・ナオジロー」の生没年を確認する目的で2019年８月22日にミュンヒェンの関連文書館で史料調査を実施した。残念ながら、没年に関する史料は見出せなかったが、生年についての史料は新たに入手することができた。

調査方法として、まず事前にインターネットを使って「マリイ」の住居近く、すなわちホフシュタットの教区教会の生年に関する史料を探した。以前調べた史料によると、「マリイ」はカトリック教徒であった。ミュンヒェンはカトリックの信者の多い都市であるため、当然のことではある。カトリック教徒であれば、アルベルト・ナオジローの出生の地区教会に登録することが一般的とされる。そのため、地区教会に残された史料を探すことにしたのである。その結果、ミュンヒェンの司教区文書館（Diözesanarchiv München）に残る受洗者名簿（Taufbücher）がインターネットで公開されており、そこに名前が出てくることがわかった。そこで2019年８月22日に実際に司教区文書館を訪れて、オリジナルの史料の確認を行った。手書きの名簿のため部分的に解読が困難だったが、文書館のロランド・ゲッツ博士（Dr. Roland Götz）の協力を得てほぼ解読することができた[3]。

2　史料の内容

今回関係する史料はすべて手書きである（図１）。以下に、受洗者名簿に記されていた関連箇所を書き出す。

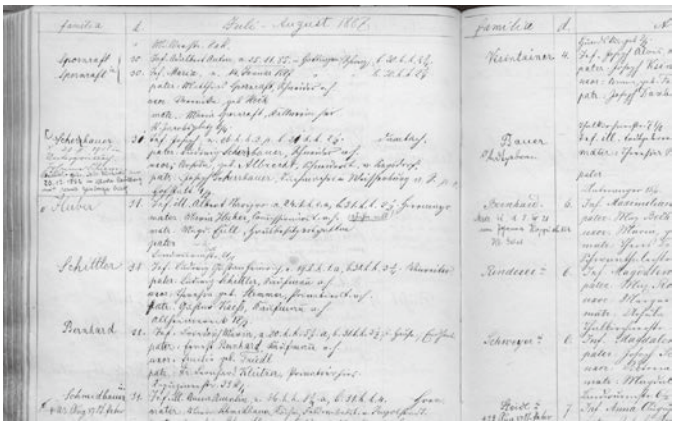

図１

Hofstatt 1/2
Inf. Ill. Albert Narijiro n.24.h,h,2 a., g. 31.h.h. 2 1/2 hiermayer
mater: Maria Huber, Commisionaret. a. M. 18 Jahr alt!*

matr: Magd. Eull, Hausbesitzergattin
pater ~ n Jo*

*は鉛筆書き。ゲッツ博士は後で記載されたとみなしている。

上記の史料を日本語に訳出すると以下のとおりとなる。

ホフシュタット1/2
アルベルト･ナリジロー　７月24日午前２時に誕生　７月31日14:30洗礼。司祭 ヒエルマイヤー
母親：マリア・フーバー　取次人の娘　　18歳！
洗礼のときの代母：マグダレーナ・オイル、家主
父親：いない　　日本人

3　史料の解説

3.1. 生年の確定

これまでアルベルト・ナオジローの生年に関しては、６月24日の説と、７月24日の説との２説があった。今回の史料によってようやく後者の７月24日の生誕であることが確認できた。さらに夜中の午前２時に生まれていたこともわかった。

「マリイ」は前回指摘しているように、住所をミッテンヴァルトからミュンヒェンのホフシュタット２番地の１に移した日が、７月24日だった。今回の史料によってアルベルト・ナオジローの誕生が７月24日であることが確定したことによって、マリイが住居を変更したのは、アルベルト・ナオジローの誕生によるものであることが確定した。この場所に両親も住んでいたようであり、シングルマザーとなった立場からの判断であったことはまちがいないだろう。

3.2. アルベルト・ナオジローの名前をめぐって

名前の表記に注意したい。名前がNaojiroではなく、Narijiroとなっているが、これについてゲッツ博士は、ドイツ人にとって日本語の発音を正確に聞き取ることが難しかったために表記に誤りが生じたのではないかと推察している。バイエルン州立文書館に残されている史料では、Albert Naojiroと正確に記載されていたことを振り返るならば、おそらくゲッツ博士が推定するように日本語の発音に不慣れなことから生じた誤記と考えられる。

ところで、前回の考察では、「マリイ」の子供は、訴訟の際には「アルベルト･ナオジロー･フーバー」の名称が使われていたが、その後の住所票や独身票では、「アルベルト・フーバー」と書かれており、日本名は省略されていた。今回の史料によれば、受洗のときには日本名が使われていたことが確認し得た。そのために、マリイがその後に恣意的に日本名を使用しなくなった可能性が高まった。なぜ使用しなくなったのか、その理由には、原田がいなくなったため、ナオジローをドイツ人として育てることを決めたためではないかと想定される。

3.3. アルベルト・ナオジローの父親と母親について

この史料には後で書かれたと思われる鉛筆書きがある。そのひとつが、母親の「マリイ」について、「18歳（18 Jahre alt!）」と書かれていたことである。驚きや強調を示す感嘆符がつけられており、18歳であることがなにか特別の意味をもっていたようである。ただし、それが若すぎ

る母親の意味なのか、あるいは見た目がとてもそうは見えないという意味なのか、様々な憶測ができるが、それらを確定する事象は現在存在しない。

また父親についての記載だが、これも鉛筆で書かれている。「父親はいない（Vater nicht）」とあり、さらにそのあとに書かれている言葉は、筆者には解読できず、ゲッツ博士と専門の女史の協力で「ある日本人ein Japaner」と書かれていると判読された。つまり、この時点で、マリイは、誕生した子供が、日本人との間に生まれていながら、父親がいないことを明言していたことがわかる。

この後の、1892年１月15日に、原田に養育費を請求してくる事件がおこっているが[4]、おそらくこうした洗礼を受けていることから、教会からの助言なども受けて、マリイが対応した可能性はあるだろう。

3.4. 洗礼について

今回の史料から、アルベルト・ナオジローはカトリック教徒であったが、誕生から７日後の31日の午後２時30分に洗礼を行ったことがわかった。教会は聖ペーター教会である。

洗礼の際に保護者の立場であった人物についても名前が残されており、マリイの母親でなく、マリイの住居の所有者の夫人であったマグダレーナ･オイルMagdarena Eullであった。鷗外の「マリイ」の社会的立場を振り返ると、父親がいても裕福ではなかったとされる。そのこともあったのか、ある程度の資金のある家主が、アルベルト・ナオジローの代理母になっていた。

おわりに

今回の史料によって、たしかに原田とマリイの間に男子が生まれており、その生年も、従来の二説に対して７月24日説を確定することができた。また洗礼のときには、日本名のナオジローも使われていることが確認し得た。それによって、その後日本名が使われなくなるのは、父親がいなくなったことが要因のひとつになっている可能性が想定された。

今回の調査では、Diözesanarchiv München Dr. Roland Götz氏の協力によってすすめられた。ここに深謝申し上げる。

---

[1] 拙稿「洋画家原田直次郎の非嫡出子アルベルト･ナオジロー･フーバーおよびその母マリイ･フーバーに関する史料と鷗外筆『獨逸日記』」（研究ノート）別府大学大学院紀要2019年、77-85頁。

[2] 『鷗外全集』第35巻、1974年、岩波書店、145-146頁。丹尾安典「原田直次郎評伝　うたかたの自然児」『日本の近代美術１　油彩画の開拓者』（責任編集 丹尾安典）大月書店、1993年、91-96頁を参照。

[3] 没年についてゲッツ博士に相談したが、Ledigbuchには書かれていないので、不明とのことであった。これ以上の情報は州庁で尋ねるとよいとの助言をもらったが、すでに筆者は調査をおこなっており、それにも没年は出てこなかった。この資料については、拙稿「洋画家原田直次郎の非嫡出子アルベルト・ナオジロー・フーバーおよびその母マリイ・フーバーに関する史料と鷗外筆『獨逸日記』77-85頁を参照。

[4] 拙稿、前掲論文、78-79頁。